

特殊文献目録編集に関する問題点

——ヒルファディング文献目録編集に関連して——

細 川 元 雄*

本稿は、1969年5月の経済資料協議会の総会（於同志社大学）において報告したものをもとに書きあらためたものである。報告当時の大学紛争に触発されて提出した問題は、個人的動機を述べた点が多く、1年を経過した現在、準備不足もあるが、問題を一般化することが困難であった。また当日提出した「ヒルファディング著作リスト・文献リスト」は、ミスタイプなど誤字、重要な文献の脱落など多く、そのご専門研究者の方々より多数ご教示を賜った。訂正、追加するうゑに、その一部を本稿に付した。

ご教示下された先生方に深く感謝すると同時に、当日報告を聞いていただいた方々におわび申し上げる。

1970年6月1日

はじめに

社会科学、もっと限定して経済学におけるドキュメンテーションに従事する者にとって、今日の発達せる情報理論および情報技術の意義と限界を明らかにすることは、大切な課題であります。数年前から、わが国においても「コンピューター革命」といわれ、あらゆる分野での関心が利用可能性をめぐる追及されております。まさに情報革命時代の出発点 (on the threshold of an “information revolution” —J. Diebold) においてその成果と展望を明らかにすることは、私たちにあって、とくに重要な課題であると痛感いたしております。

私が報告しようとする領域は、特定主題の文献目録であります。それは、経済学におけるドキュメンテーションの分野において非常に限られた領域であります、同時に基礎的でしかも伝統的に多くの成果をもっている領域であります。主題別、個人別の遡及的な目録編集の仕事は、経済学研究自体の特性から重要な位置をしめ、研究者から尊重され、評価されてきたものであります。

私の報告目的は、「積塵の書庫の中で、夏は泥汗を流してうだり、冬は手がかじけて字が書けなくなる」（天野敬太郎氏）という先人の苦勞を追体験し、特定主題

*ほそかわ もとお 京都大学経済学部調査資料室

の文献目録編集にまつわる諸問題を材料に、私たちドキュメンタリストとしての課題に接近しようということでもあります。

問題は、特定主題の文献目録という特定主題の選択にかかわることでもあります。さらに選択された主題の文献検索にまつわる問題でもあります。かくして結論から先に言いますと、当然のことではありますが、研究者とドキュメンタリストの組織的協力関係、共同作業の必要性であります。今日「学問の拡大再生産」における体制確立こそが、とりもなおさずドキュメンタリストの自立化の道であるということをしつこく繰り返して強調するにすぎません。

1 特定主題文献目録の編集主体

「なぜヒルファディングの目録を編集したか」。この問いに答える前に、一般的に蔵書目録などにおいても、その編集目的の明確化が、その目録の良否を決めることになり¹⁾、とくに特定主題の目録においては、研究者、研究活動との関連が問われなければならないと思います。特定主題の文献目録（専門書誌 special bibliography）の編集目的を問うことは、多様な側面をもっております。まず「研究のため」という研究者、研究活動の側をみてみますと、研究テーマの選定は、研究者にとって「学問の世界」のコミュニティの一員になるかならぬか、研究者が自から発見しなければならない。「それ（テーマ）が学問のコミュニティからみて客観的なテーマかどうかは保証のかぎりではない。むしろあらかじめ客観的と保証されているテーマを追求することは、学問的操作の残がいであって、学問的作業の本質は、従来の学界がこだわっていたテーマの土俵をふとはずして、学問的なコミュニティの全体の分業体系を組み直すというか、なにが意味のある仕事、……なにが『生産的労働』であるかがガタリと変わってくるような新しいテーマの発見にある²⁾」といわれています。私たちの仕事たる文献の検索、目録編集は、この「残がい」を検出し、一定の基準で整理することでもあります。しかし経済学、広くいって社会科学の特性が、「そこであつかわれる客観的事実だけをおうわけにはいかない³⁾」、その

1) 蔵書目録の編集目的について、「何を第1義的な利用目的とするか検討することが最も必要とされる」といわれている。前田昇三「書評 関西大学図書館蔵書目録」, 本誌第1号, 57ページ。

2) 内田義彦『日本資本主義の思想像』, 岩波書店 24ページ。M・ヴェーバーの「職業としての学問」についての内田氏の解釈であり、同時に大塚久雄氏の「現代における社会科学の展望——とくに『専門化の問題』について——」, 著作集第9巻が参照されるべきである。

3) 水田洋「社会科学の特質」, 伊大知良太郎他編『社会科学ドキュメンテーション』, 丸善 10ページ。

もつ主観性・イデオロギー性、さらに歴史性という点で特徴づけられております。とすれば、そのテーマに対する研究史、問題史としての整理基準の模索が加わり、そのこと自体が研究者の研究活動の領域であります。私たちの仕事は、テーマが選定され、整理基準が与えられたとしても、文献の網羅性を保証することはできません。常に、研究者から「研究をしていないと網羅的に集められません」、「研究をしていないと文献目録は役立ちません」という声に悩まされます。つまり研究活動において必要とする文献は、周知のように過去の研究を調査するリトロスペクティブ・サーチだけでなく、データ・ファインディング、カレント・アウェアネスなど、研究過程で発見し、発掘する文献が必要であるということでもあります。だから有効な文献目録は、研究の最初の段階に姿をあらわし、研究成果と一緒に再びあらわれ、次の研究の出発点へと継続されるものであります。「専門書誌の良否は1つにかかって編さん者の知的能力のいかにかかっていること」といわれますが、私はドキュメンタリストとしては、「学問の拡大再生産過程」に密着して、研究者のうちにあるということだと思っております。

しかし、私が感じております現実の研究体制は、私たちの仕事（ドキュメンテーション）を入れていく余地がほとんどありません。極端な表現をとりますと、その原因は、「学問の専門化」、「細分化」⁴⁾を標榜して、その実研究者個人の業績を重ねる傾向であります。この傾向は、図書・資料そのものの「独占」を生み、図書・資料の仕事に対する無理解を生みだしております。私たちの側から、この現実に対応し、研究者個人へのサービスによってドキュメンテーションの体制づくりを破っていく傾向もあることを強調しなければならないとも思います。

すでに研究者と図書・資料従事者との協力体制への問題提起は、たとえば当会会報第6号で杉原四郎教授によってなされております。また私たちの側からも、「文献の検索と文献の研究におけるドキュメンタリストと研究者の境界をはっきり定め、その上で協力を考えなければ⁵⁾」と提起されております。この協力問題こそ、今日の学問のあり方——研究者のあり方、研究体制——そのもののうちにあると私は痛感しております。

「なぜヒルファディングを選んだか」というドキュメンタリストの側の問題にうつりますと、当同志社大学人文科学研究所にあります「帝国主義論」の研究グルー

4) 注2掲載の著書と内田義彦氏の「社会科学の視座」(『思想』第535号、1969年1月)を参照。

5) 細谷新治「文献センターの現状と問題点」、国立大学文献センター編『文献センターの利用案内』昭45年2月刊、50ページ。オリジナルは、『図書館界』90号、1966年3月、195ページ。

プでありますと、問題として生じないのですが、私の場合は、研究者との協力体制から主題選択が生れたのではなく、純粹個人的興味から出発したとしか言えません。問題を一般化することができませんので、私個人の動機を述べさせていただきますと、私は、「国民のための科学運動」の時期に大学生活を送り、経営学批判を夢みて、一時期大学院生活を送りました。ヒルファディングとの出会いの最初は、株式会社論でありました。資料関係に従事しましてからは、大学院生の研究会に入り、彼の「金融資本論」を読むことになりました。ときあたかも、経営・会計学にはじまり、経済学の領域に広がった「プレミアム論争」と重なっておりました。私は最初のガイド役として、ヒルファディングの略年譜を加えた「金融資本論」文献目録ノートを作成しました。あとで問題としますが、「大学院生には、こんなに多くの文献を指示しても読めませんよ」という反応があったことだけ紹介しておきます。そのご、私は大先輩天野敬太郎先生の「日本マックス・ヴェーバー書誌」にならって、「日本ヒルファディング書誌」を作成しようと、ヒルファディングの著作に手を出していきました。「Neue Zeit」誌、「Kampf」誌などから彼の論文をカード化した段階で、ある先生から Gottschalch の著書⁶⁾を借り、そこに掲載されたヒルファディングの著作目録と関連文献リストをみて、がっかりしました。私の調べたものとあわせて、この点あとで述べますが、数点おちていると思った程度で、この作業を中止しました。再び取り出しましたのは、当総会で発表者になったということもありますが、先述の図書・資料に従事するものの地位、役割など一つの限界点にたたされていると考え、また「君たちが勝手に目録をつくっても役にたたない」という声に反撥を感じたからであります。しかし現在は全く自信がありません。といって発表をやめるわけにはまいりませんので、一方的に主張させていただきます。

ヒルファディングの著作文献は、学説史、思想史の領域では対象そのものであります。彼の著作文献の検出と目録化は、学説研究と一応境界を引くことができますが、次節に紹介します彼の生涯と活動分野を知らなければ、現状では不可能でしょう。

他方、ヒルファディングを対象としたわが国での研究文献は、マルクス主義思想の継承と発展という学説・思想史の研究領域から最新の資本主義の発展という帝国主義論への領域へと拡大し、リトロスペクティブ・サーチとしては、莫大な文献量

6) Wilfried Gottschalch: *Strukturveränderung der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*. Berlin: Duncker & Humblot, 1962.287S.(Sozialwissenschaftliche Schriftenreihe der Wirtschafts-und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Freien Universität Berlin, Soziologische Abhandlungen Heft 3)

になってまいります。文献の網羅性という点では、「信用論」、「帝国主義論」、「恐慌論」など主題をしぼったうえで文献を検索することが考えられますが、しぼった主題自体が、関連領域を含む論争史、問題史を含む研究史をもっており、機械的作業で検索することは不可能であります。私一人ではじめた以上、わが国での研究動向を不完全でも見透しておかなければなりません。

2 ヒルファディングの生涯とわが国での研究

ここで、ヒルファディングの生涯と活動およびわが国における研究動向にふれることとなりますが、このことは、私が編集する文献目録の必要、不必要を決定することです。我田引水になりますが、以下に簡単に述べておきたいと思います。

ルードルフ・ヒルファディング (Rudolf Hilferding) は、1877年8月10日ウィーンの富裕なユダヤ人商人の家に生れた。ウィーン大学で医学を学んだが、学生時代から社会科学に強い興味をもち、社会主義運動に接近した。1902年以後カール・カウツキー (Karl Kautsky) の勧めで、「Die Neue Zeit」誌に寄稿をはじめた。1904年には、マックス・アドラー (Max Adler) とともに「Marx-Studien」を創刊し、その第1巻に「ベーム・バウエルクのマルクス批判」を公刊した。この第1巻には、ヨーゼフ・カルナー (Josef Karner, これは Karl Renner が用いたペンネーム) とアドラーがそれぞれ「法制度の社会的機能」と「学問論における因果律と目的論」とを掲載した。のちこの三人が、オーストリア・マルクス主義学派 (austro-marxistische Schule) の創設者たちといわれている⁷⁾。そのご、彼はドイツ社会民主党に結びつき、1906年ベルリンに出て、党学校の教師をし、ついで党機関紙「Vorwärts」の編集部に入り、宣伝活動に従事した。その間、20世紀初頭の「最近の資本主義的發展に関連のあるすべてのこと⁸⁾」に注目し、「Die Neue Zeit」誌上に経済理論、保護関税論、ゼネラル・ストライキ論にはじまり、1910年彼の代表作「金融資本論」の素材の内容をしめすものを発表した⁹⁾。1910年ヒルファディングは、Marx-Studienの第3巻として「金融資本論」を刊行した。これによって当

7) 「ヒルファディングが、オーストリア・マルクス主義学派を起した経済学者であり、レンナーがその国法理論家だったとすれば、マックス・アドラーはその哲学者であった」と。田川恒夫「オーストリア・マルクス主義の多民族共同体論——オーストリア社会民主党の結成からブリュン民族綱領まで」、『現代の理論』第49/50号、1968年3月、47～66ページ参照。

8) 長坂聡「ヒルファディングのカウツキーあての手紙」、『唯物史観』第5号、1967年11月、99ページ。

9) 星野中「『ノイエ・ツァイト』誌におけるR・ヒルファディング(1)」、『経済学雑誌』第61巻第5号、34～48ページ参照。

時の指導的なマルクス主義理論家として認められるにいった¹⁰⁾。1914年第1次世界大戦が勃発すると「Vorwärts」編集部とともに、戦争反対の立場をとり、党幹部会に戦時公債承認に対して抗議の声明を発表した¹¹⁾。翌15年彼はオーストリア・ハンガリー軍隊に召集され、軍医としてイタリア戦線ですごした。

ヒルファディングは、戦争によって「1914年から1918年革命との間に積極的な政治的役割を除かれ¹²⁾」、ドイツに帰還し、1917年4月にドイツ社会民主党より分裂して結成されたドイツ独立社会民主党に所属した。ただちにその機関紙「Freiheit」の編集長となり、カウツキーとともに、党内で指導的地位につき、のちドイツ共産党と合同する急進派と対立し、党を社会民主主義へ導びこうと試みた¹³⁾。1920年ハレーの党大会でコミンテルン加入問題が論争されたとき、彼は共産党否認の立場からコミンテルン代表のジノヴィエフらに反対した党内少数派の指導者であった。この問題による独立社会民主党の分裂後、1922年少数派とともに親元のドイツ社会民主党に復帰した。その間、彼は、18年革命後生れた「社会化委員会」の活動的メンバーになるなど¹⁴⁾、当時の労働運動の中で活動した。合同後のドイツ社会民主党において、ヒルファディングは指導的な理論家としてだけでなく、党幹部の一人、ワイマル共和国の国会議員、さらに理論機関紙「Die Gesellschaft」誌の編集者など党の実政策に影響を与えた。「Die Gesellschaft」誌の第1巻第1号（1924年）に、彼は「時代の問題」を発表し、のちの1927年キール大会で党の理論として公認された。「彼はワイマル共和国後半期において、第1線から引退したK. カウツキーに

10) 「マルクス『資本論』の続刊だといふことができる」(K. Kantsky: Finanzkapital und Krise. *Die Neue Zeit*, Jg. 29. Bd. I 1910)。「われわれの待望久しかりし書物」(Otto Bauer: Das Finanzkapital. *Der Kampf* Jg. 3. Ht. 9. 1910)。1912年には Eduard Bernstein の書評 (Die moderne Finanz im Lichte der Marxschen Theorie. *Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpolit.* Jg. 35). さらにレーニンの「帝国主義論」での評価を参照。

11) 上杉重二郎『ドイツ革命運動史』（青木書店、1969年11月）の1914年第1次世界大戦開始まえの状況と社会民主党の評価を参照。村瀬興雄『ドイツ現代史』（東大出版会、1954年3月）は、当時のドイツ社会民主党状況が述べられている。

12) Paul M. Sweezy の Editor's Introduction より。Karl Marx and the close of his System by Eugen Böhm-Bawerk and Böhm-Bawerk's criticism of Marx by Rudolf Hilferding....., N. Y. 1949, 邦訳、14ページ。

13) 森戸辰男「ドイツ両社会民主党合同前史」、『大原社会問題研究所雑誌』第2巻第1号、1924年4月、237～366ページ参照。

14) 岩城忠一「転形期の経済問題——独・奥社会民主主義者の社会化論に関する一考察——」、『資本論体系上』、改造社、1932年8月、299～394ページ参照。

代ってドイツ社会民主党の理論面での最高指導者としての権威を確立していた¹⁵⁾」。彼の理論が、いわゆる「組織された資本主義論」として展開され、革命ぬきの社会主義実現論という性格によって改良主義者とみなされた。さらにドイツ社会民主党が連立政権に参加した際、1923年と28年に二度大蔵大臣になった。「二度ともほとんど手腕を発揮することなく地位を去った¹⁶⁾」といわれ、「大蔵大臣としての彼は、1923年のインフレと1929年にさししまった不況に関して、ひとしく無力であった¹⁷⁾」と評価されている。さらに重要なことは、彼とドイツ社会民主党の指導部がナチズムの危険に対して過少評価し、ついにワイマル共和国の滅亡と運命をとにしたことであった。「高い知的な資質はもっているが大衆の状態に対するいかなる感受性も全く持ちあわせず、戦後の大きな社会的変化に対する洞察力を欠いた人々を指導者に持ったことは、社会民主党や労働組合の悲劇であった¹⁸⁾」といわれている。

1933年の亡命から1941年の没年と思われる時期の彼の活動は、最初はデンマーク、ついでスイス、38年以後はフランスへ亡命し、反ナチ運動を続けた。1933年10月カールスバートで「Zeitschrift für Sozialismus」誌（第1号は Sozialistische Revolution という誌名）を出版し¹⁹⁾、K. Kern, R. Kern のペンネームで理論的活動をおこなった。1934年1月彼はドイツ社会民主党のブラーク宣言 (Kampf und Ziel des revolutionären Sozialismus. Die Politik der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands.) を起草し、そこで「ワイマール共和国制下での SPD の改良主義的活動と理論を否定し、労働者階級が革命的方法をもってナチスを打倒し、国家権力を奪い、この国家権力を社会主義建設のために利用すべきだと主張した。またドイツ第三帝国の国内情勢を分析することによって、ドイツと西欧諸国との戦争の不可避性を予見し、それに対処すべきことを警告した²⁰⁾」といわれている。ヒルファディン

15) 山口定「ワイマル共和国末期における社会主義と民主主義——戦後民主主義の再検討のめたに——」、『現代の理論』第68号、1969年9月、33ページ。「ヒルファディン」の当時の立場が、『金融資本論』のなお学究的な観察者から社会民主党という現実の政治運動の理論的指導者へと移行している」とも同氏は指摘されている（「ワイマル共和国後半期におけるドイツ社会民主党内の国防論争」、『立命館法学』第81・82号、1968年11月、47ページ）。

16) 林健太郎『ワイマル共和国』（中公新書）、149ページ。

17) Sweezy 前掲注12より。邦訳15ページ。

18) Franz Neuman; *Behemoth*. 岡本友孝ほか訳、みすず書房、1963年10月、35ページ。

19) Gottschalch, 前掲注6, S. 232 および極東書店ニュース、1970年3月。

20) Gottschalch, 前掲注6, S. 228~241, この文章は、保住敏彦「ドイツ社会民主党と関税問題」『西洋史学』第78号、1968年7月のヒルファディン略

グの最後は友人 Breitscheid などとともに「ドイツ軍のフランス占領ののち、アメリカに逃れようとしてマルセーユにおいてヴィシー政府に捕えられた。彼はブッヘンヴァルトの収容所で死んだとも伝えられたが、ドイツ政府に引き渡される際に自殺したというのが正しいようである²¹⁾。」とすれば没年は1941年2月頃であるといえる。

以上、主としてわが国で紹介された文献にもとづいて彼の略伝を述べてみました²²⁾。わが国でのヒルファディングの研究は、私の知る限りでは、1923（大正12）年4月久留間鮫造氏によって「金融資本論」の第1編第1章の前半が翻訳発表²³⁾されたのにはじまっております。1922（大正11）年頃にはじまるいわゆる「マルクス価値論争²⁴⁾」を契機として、1925（大正14）年には、「小泉信三氏のマルクス批評と

伝から引用した。ゴットシャルヒ「ブラーグ宣言」の項の詳しい紹介は、今野登「西ドイツにおけるヒルファディング研究」『武蔵大学論集』第13巻第1・2号、1965年6月、23～25ページにある。なお、村瀬興雄「ドイツ社会主義の『転換』」『思想』第481号1964年7月参照。

21) 林健太郎、前掲注16、150ページ。

22) わが国で紹介された彼の生涯と活動を刊行順にあげると、林要「ヒルファディング金融資本論（名著物語）」（『経済往来』第6巻第6～7号、1931年6～7月のち同著『貨幣のない社会』、戦後『金融資本の理論』（青木文庫）に収録）、向坂逸郎「ルドルフ・ヒルファディングと『金融資本論』」（『書評』、1948年10月、のち『マルクスをめぐる』に収録）、横山正彦「ヒルファディングの生涯と著作——一つの歴史的教訓——」（『思想』第335号、1952年5月、のち『経済学の基盤』に収録）、大島清「ヒルファディング」（相原茂編『マルクス経済学の発展——経済学説全集第8巻』、河出書房、1956年11月）、岡崎次郎「ヒルファディングと『金融資本論』について」（同氏訳『金融資本論下』岩波文庫、1956年5月）、佐藤定幸「ルドルフ・ヒルファディング」（『一橋論叢』第47巻第4号、1962年4月）、今野登、前掲注20；長坂聡、前掲注8；保住敏彦、前掲注20；星野中、前掲注9。

23) 『大原社会問題研究所雑誌』第2巻第1号、367～382ページ。訳者は、「吾々は之に依って同時に古典派及壟太利派の経済学に対するマルクス派経済学の根本的特徴の一端を覗うことができるであろう」といい、当時の「価値論争」を意識していると考えられる。

24) 「批判者側に小泉信三、土方成美、高田保馬、反批判者側に山川均、二葉大三、河上肇、橋田民蔵、舞出長五郎の各氏が登場して、1927、8年頃まで随分長く続いたが、この論争において批判者側は大体においてボーム・バヴェルクに依拠し、これに対して反批判者側の所論は多くの点においてヒルファディングに一致していた」と。相原茂「マルクス経済学の批判と反批判」（向坂逸郎編『マルクス経済学の形成——経済学説全集第7巻』）278～279ページ。なお、わが国の価値論争の紹介は多数あるが、本格的な研究として川口武彦『価値論争史論』、法律文化社、1964年を参照。

なっている際、これを提供することは必ずしも無用であるまい」と河上肇氏の監修のもとに赤松五百麿訳の「ボエーム・パウエルクのマルクス評」が『我等』誌上に掲載されました。「金融資本論」は、まずオット・パウアーの書評（前掲注10参照）が八木沢善次氏と赤松五百麿氏によって、1924（大正13）年7月に『社会思想』と『我等』誌上に翻訳紹介され、翌年猪俣津南雄氏による「金融資本論」名で著書が刊行されました。これは、ヒルファディングの「金融資本論」を「解説と紹介とを兼ねたる²⁵⁾」もので、「日本のマルクス経済学にとってもはじめての体系的な²⁶⁾」ものであった。1926（大正15）年林要氏による全訳が刊行され、この訳本は、「訳文も正確でなめらかで、原文をこれ以上に読みよくすることはなかなか困難だろう²⁷⁾」と評価されております。1922年から26年に至る大正末期を、「日本社会主義文献解説²⁸⁾」は、「日本共産党の結成から、その解党を経て、再建にいたるまでの内面的過程と、一方に社会民主主義が意識化し、組織的に結集しはじめた状況、ならびにその相互の対立の激化が反映している²⁹⁾」と述べられております。当時マルクス・エンゲルスの文献の邦訳導入状況は、内藤赳夫氏による「邦訳マルクス＝エンゲルス文献³⁰⁾」によってみることができますし、レーニンの「帝国主義論」が青野秀吉氏の訳によって刊行されるのもこの時期であります³¹⁾。昭和初期に入り、ヒルファディングのマルクス経済学の研究と、「金融資本論」のわが国における研究は、本格化しはじめます。それはわが国の資本主義分析の深化とともに、他方中西寅雄氏の「経営経済学」、大塚久雄氏の「株式会社発生史論」、近藤康男氏の「農業経済論」などへ深化してまいります³²⁾。

25) 希望閣、1425年4月、5ページより。普及版は、1927年4月、のち1929年2月に改造文庫に入る。

26) 林健久「猪俣津南雄」（『日本のマルクス経済学 下』、青木書店、1968年1月）、13ページ。

27) 向坂逸郎、前掲注22、178ページ。

28) 細川嘉六監修渡部義通、塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説——明治維新から大平洋戦争まで——』、大月書店、1958年2月、339、31ページ。

29) 同上、13ページ。

30) 『大原社会問題研究所雑誌』第6巻第1号、1929年4月、のち同所の『アルヒーフ』No. 3、同人社書店、1930年5月刊。

31) 内藤赳夫氏によると「レーニン文献」の編集が完了した（同氏「カール・カウツキー文献（一）」、『大原社会問題研究所雑誌』第10巻第3号、1933年11月）といわれているが不明である。レーニン導入史としては、村田陽一「最初に日本へ紹介されたレーニンの文献」（『経済——レーニン生誕100年を記念して』第72号、1970年4月）を参照。

32) 昭和初期は、「日本のマルクス主義陣営には、マルクスをはじめ、ブハーリ

戦後のわが国におけるヒルファディングの研究史は、課題として専門研究者におまかせし³³⁾、ここでは研究領域の拡大を指摘したいと思います。まず前にもふれましたように、マルクス経済学の継承と発展の領域は、現代独占資本研究にかかわり、レーニン「帝国主義論」とともに拡大しております。最近さらにメルツ (Eduard März) によれば、スウィージ、バラン、マグドーフへの継承を指摘しております³⁴⁾。第二に、学説史・思想史の領域で本格的な展開がなされはじめてきたこと³⁵⁾、第三に労働運動史、ドイツ社会民主党の研究、マイマル共和国からファシズムの研究にか

ン、レーニン、カウツキー、ローザ、ヒルファディング等々の諸理論が、何の脈絡もなく重畳して移植され、おたがいの正当性を誇りあうという混沌とさえいえる状況にあった」(志村賢男「戦前の日本における帝国主義研究」『社会科学・別冊——帝国主義論の方法』、1969年3月、12ページ)といわれ、そのごどのように定着していくか、ヒルファディングを中心としてみることは今後に残されている。なお、向坂逸郎氏(前掲注22)、大内兵衛氏『経済学50年上・下』、東大出版会、1959年5～6月)、宇野弘蔵氏(『資本論五十年 上』、法政大出版、1970年2月)などの人々の当時の証言が役に立つ。

- 33) 戦後の研究動向を知るうえに、大阪市立大学編『社会科学文献解説』(全10冊)、同『経済学文献解説 1955』、1957年以後の『経済評論』の回顧と展望(1963年で終わっている)、現代史として『史学雑誌』の各年の歴史学界の回顧と展望、および「最近十年間における社会経済史学の発達」(『社会経済史学』第31巻第1～5合併号)と井上幸治、入交好脩編『経済史学入門』(広文社)など、さらに学説史研究の動向は、『経済学史学会年報』、(第1～7号〔最新号〕)によって、あきらかにされる。

- 34) R. Hilferding: *Das Finanzkapital*. Frankfurt a. M.: Europäische Verl., 1968. Einleitung von Eduard März.

- 35) Fred Oelßner の Vorwort zur Neuausgabe を付した「金融資本論」の第2版、1955年刊がわが国に入手されるようになり、また玉野井芳郎、石垣博美両氏による『ヒルファディング マルクス経済学研究——マルクス経済学前史・ベーム・バウエル批判その他』の翻訳が1955年に刊行されたのをさかいとして、まず大島清氏(前掲注22)、古沢友吉氏(「ヒルファディング『金融資本論』の出発点」、『横浜市大論叢』7(3)、1956年;「マルクス経済学の系譜」、越村信三郎編『最近の独占研究』1959年など)。高山満氏(「ヒルファディングにおける『理論経済学の問題提起』」、『東京経大会誌』第25号(1959年)にはじめる一連の論文)。1960年には、宇野弘蔵氏「ヒルファディング『金融資本論』における原理論と段階論との混同について」が『思想』で発表され、最近注目されるのは、づきのものである。

戸原四郎：マルクス経済学の発展のころみ;「資本論講座第7分冊」(青木書店、1964年)に収録。

大野英二：ドイツにおける帝国主義論の展開——『資本類型』とヒルファディング『金融資本論』の理論構成;『経済学史講座3』(有斐閣、1965年)、

のかわって、彼の後期の著作が対象とされるようになった³⁶⁾のは注目されてもよいと思います。

3 ヒルファディング文献目録編集上の問題

前節で述べましたように、ヒルファディングの活動領域とわが国での研究領域をほぼ確定し、著作目録の編集と日本ヒルファディング書誌の編集に関する問題にかえらしていただきます。

彼の著作目録は、先述のゴットシャルヒにほとんど依存しております。本稿の末尾に掲載させていただきましたものは、ゴットシャルヒの著作目録のうち「Vorwärts」,「Freiheit」などの新聞類の論文を除き、私が多少発見し、追加したものであります。対象が外国人で、しかも両世界大戦にまたがって活動しておりますので、わが国での検索には限界があります。新聞類については、所蔵のものを調べはじめましたが、無署名の場合と語学能力とによって頭をうちました。今後の仕事としてやっていきたいと思っておりますが、この点、研究者、他のドキュメンタリストとの協力が必要であります。アムステルダム国際社会史研究所のブルーメンベルグ (Werner Blumenberg) によって作成されました「Karl Kautskys literarische Werk—Ein bibliographische Übersicht」(1960年)は、カウツキーの著作1800タイトルに、200点余りのリプリントと900点余りの各国語訳が目録化されております。

のち同著『ドイツ資本主義論』(未来社, 1965年)に収録。

星野中：ヒルファディング「金融資本論」の基本構造とその問題点——研究史上の位置との関連において；内田義彦，小林昇編『資本主義の思想構造』(岩波書店, 1968年)に収録。

米川紀生：Rudolf Hilferding 理論の根柢にあるもの；『一橋研究』(16), 1969年2月。

飯田裕康：ヒルファディング経済学における理論と歴史——「金融資本論」の学説史的評価をめぐる；『三田学会雑誌』63(7), 1969年7月。

- 36) 「従来の Hilferding 研究が『Böhm-Bawerks Marx-Kritik』と『Das Finanzkapital』の個々の分野の批判検討に急のあまり、Hilferding の全体像は Oelbner の言う「流通主義的偏向」という視点で簡単に切り捨て去られてしまった。そこでは経済学的にのみ Hilferding は研究対象とされた。それでは第1次大戦以降の彼の変化に富んだ政治的行動をも解明しきれないだろうし、彼の政治と経済との相互関係をも真に把握されえないだろう」と米川紀生氏の Gotkschalch (前掲注6)の書評(『一橋論叢』第59巻第5号, 95ページ)において提起されている。山口定氏, 前掲注15および「秘密再軍備とドイツ社会民主党——ワイマル体制崩壊原因論の一視角——」, (1~5, 『立命館法学』第71~73, 75, 80各号), 村瀬興雄氏(前掲注11), 上杉重二郎氏(前掲注11)など。現在編集中の「社会民主党と組織された資本主義論についての日本文献」参照。

この仕事は、国際協力もあったと言われ、私に挫折感をおこさせます。わが国においては、類似の目録は、すでにふれましたように大原社会問題研究所の内藤超夫氏のものと天野敬太郎氏のものなど³⁷⁾があげられます。日本ヒルファディング研究文献にうつりますと、すでに述べましたように文献の大量性と検出される文献の整理基準との問題があります。私の調査が最初研究者（大学院生）のガイダンスとして出発したため、経済学一般の入門書、概論、辞典などを除きました。これは研究内容に一定の価値判断を入れることでご批判を受けることになりますが、「機械による情報検索は速さと多面的な接近という点でこの問題（価値判断の加わること）を解決する将来の有力な方法の1つである³⁸⁾」ことに期待しておきます。しかし現実には、ドキュメンタリストとしても、それぞれの対象（テーマ）に、それぞれの整理基準の模索がその研究動向への注目と同時になされなければ、有効な文献目録とはならないと言えましょう。さらに、文献の価値判断を加えなければ、解題目録、データ・ファイルなど User に応じた編集ができないと思われます。ヒルファディングに関連したわが国での主題別文献目録をみてみますと、杉本俊朗氏の「信用理論文献目録³⁹⁾」、多くの独占、帝国主義に関する文献目録⁴⁰⁾、住谷悦治氏の「『恐慌論』文献目録⁴¹⁾」などが編集されております。今後本誌においても主題別の文献目録が展開されることを期待いたしております。このような既存の文献目録を対象とした研究が本格的にされなければなりません、残された課題としておきたいと思えます。

37) 内藤超夫、前掲注30, 31。天野敬太郎『河上肇博士文献志』（日本評論新社、1956年）、同『Bibliography of the classical economics. Vol. 1～5』（日本学術会議、1961～64）、同『日本マックス・ヴェーバー書誌』（『関西大学経済論集』第14巻第6号、第16巻第1号、のち『マックス・ヴェーバーの思想像』に収録）。なお田村雲供「ローザ・ルクセンブルグ文献目録」（『社会科学』第2巻第1号、1967年2月）も注目される。

38) 坂田貞宣、「社会科学資料の利用と利用組織」伊大知良太郎編 前掲注3, 90ページ。

39) 『講座 信用理論体系Ⅲ』、日本評論新社、1956年6月に収録。

40) 富山和夫「独占にかんする文献目録」、越村信三郎編『最近の独占研究』、東洋経済新報社、1959年。清水嘉治、富山和夫「帝国主義にかんする戦後の文献目録」、『現代帝国主義講座』第5巻、日本評論社、1963年。清水嘉治「帝国主義に関する文献目録」、同著『帝国主義論研究序説』、有斐閣 1965年。同志社大学人文科学研究所「帝国主義論の方法にかんする文献目録」、『社会科学・別冊——帝国主義論の方法』、1969年3月。なおADWG 研究会「ドイツ資本主義に関する邦語文献目録（草案）」、『ORGAN』Nr.2、1965年は注目される。

41) 『松山商大論集』、第2巻第4号、1951年12月。

むすびに

以上、「なぜ特定主題の文献目録を編集したか」という問いによって、図書・資料に従事する者がその主題選択においても、その主題の研究内容においても研究者との協力関係、共同作業を組むという古くて新しい役割を再確認できたと思います。今日、私たちのおかれている地位を考えますとき、その労働条件、制度的な差別など重要なことが指摘されなければならないと思いますが、私たちは、残された課題を1歩1歩解決していくことによってのみこうした悪い条件を自から打破して、経済学におけるドキュメンタリストとしての道に進めるのではないかと考えております。

ヒルファディング主要著作目録

1. 本目録は、ヒルファディングの論著を年代順に編集したもので、各年毎に著書、報告講演などと雑誌論文を区分し、雑誌論文は、誌名のもとに発表順に配列した。なお、〔K. E.〕は、彼の筆名 Karl Emil で書いたものである。
2. 本文献は、できるかぎり現物にあたり（頁数記入）、他は Gottschalch（注6参照）によった。その他作業過程で発見したものは論題の最初に※印を付した。Neue Zeit 誌におけるヒルファディングの全文献は、星野中氏（注9参照）によって作成されている。
3. 邦訳文献は、論題の最後に番号を付しそれによって別に一括掲載した。

1903

Die Neue Zeit Jg. 21 (1902/03)

Zur Geschichte der Werttheorie. A I 213-217¹⁾

Der Funktionswechsel des Schutzzolles - Tendenz der modernen Handelspolitik. A II 274-281

1904

Böhm-Bawerk Marx-Kritik. iii, 61S. (Marx-Studien, Blätter zur Theorie u. Politik des wissenschaftlichen Sozialismus. Bd. I Hrsg. v. Max Adler u. Rudolf Hilferding.)²⁾

Deutsche Worte Jg. 23

Das Zuckerkontingent - Ein Beitrag zur Staatskapitalismus.

Die Neue Zeit Jg.22 (1903/04)

Zur Frage des Generalstreiks. A I 134–142

Karl Theodor v. Inama-Sternegg: Staat swissenschaftliche Abhandlungen.
R II 479–480

Carus Sterne: Werden und Vergehen; L. Cossa: Die ersten Elemente der
Wirtschaftslehre. R II 703–704

1905

Die Neue Zeit Jg. 23 (1904/05)

Zur Problemstellung der theoretischen Ökonomie bei Karl Marx. A I 101–
112³⁾

Dr. W. Ed. Biermann: Staat und Wirtschaft. R I 461–462

Karl Henckell: Mein Liederbuch, Neuland, Ausgewählte Gedichte. R I 567

Dr. phil. Moritz Lindeman: Urbegriff der Wirtschaftswissenschaft. R I 631

William Thompson: Untersuchung über die Grundsätze der für das men-
schliche Glück dienlichen Verteilung des Reichtums. R II 389–390

Adolf Damaschke: Geschichte der Nationalökonomie. R II 392

Neue Brife von Ferdinand Lassalle (Intieme Briefe Ferdinand Lassalles an
Elter u. Schwester. Hrsg. v. Eduard Bernstein). R II 774–775

Parlamentarismus und Massenstreik. A II 804–816

1907

Die Neue Zeue Jg. 25 (1906/07)

[K.E.] Die Auflösung des Reichstags und die Klassengegensätze in Deutsch-
land. A I 388–393

Anton Menger: Volkspolitik. R I 478–480

Dr. jur. E. Herr: Der Zusammenbruch der Wirtschaftsfreiheit und der Sieg
des Staatssozialismus in den Vereinigten Staaten von Amerika. R I
519–520

[K.E.] Die Konferenz der Parteiredakteure. A I 652–655

Georgi Toscheff: Friedrich List und Henry Ch. Carey als Vorläufer der
modernen Schutzzollbewegung. R I 757

Die Gesellschaft. Hrsg. von. Martin Buber; Bd.1 Werner Sombart, Das Pro-
letariat. 3 Alexander Ular, Die Politik. 4 Eduard Bernstein, Der Streik.

Moderne Zeitfragen. Hrsg. von Dr. Hans Landsberg; Nr. 12 Paul
Kampfmeyer, Das Proletariat. R I 853–855

[K.E.] Die bürgerlichen Parteien und der Militarismus. A II 132–134

Die Konjunktur. A II 140–153⁴⁾

[K.E.] Die Wahlen in Österreich. A II 209–211

[K.E.] Antimilitarismus. A II 241–245

G. Maier: Soziale Bewegungen und Theorien bis zur modernen Arbeiter-
bewegung. R II 299–300

[K.E.] Alter und neuer Despotismus. A II 409–411

[K.E.] Der Internationale Kongreß in Stuttgart. A II 660–667

Parvus: Die Kolonialpolitik und der Zusammenbruch. R II 687–688

1908

Arbeiterklasse und Konsumvereine. Ein Vortrag arrangiert von der Propaganda-
kommission für das Genossenschaftswesen (Verlag Adolf Ritter). Berlin

Die Neue Zeit Jg. 26 (1907/08)

Der Kampf – Sozialdemokratische Monatsschrift (Redaktion: O. Bauer,
A. Braun, K. Renner). R I 46–47

[K.E.] Der deutsche Imperialismus und die innere Politik. A I 148–163

Der Krise in den Vereinigten Staaten – Wirtschaftliche Rundschau. A I 5–
26533

Die industrielle Depression–Wirtschaftliche Rundschau. A I 591–594

[K.E.] Der Freisinn und unser Wahlkampf. A II 81–85

1909

Die Neue Zeit Jg. 27 (1908/09)

Der Revisionismus und die Internationale. A II 161–174

1910

Das Finanzkapital – Eine Studie über jüngste Entwicklung des Kapitalismus.
(Marx-Studien. Bd. III) Wien: Ignaz Brand & Co., 1910. 575S.; Wie-
ner Volksbuchh., 1920. xi, 510S.; Berlin: Dietz, 1947. xlvii, 518S.; 2.
Aufl., 1955. xxxv, 564S.; Frankfurt a. M.: Europäische Verl., 1968.⁵⁾

Der Kampf Jg. 3 (1909/10)

※Probleme der Bankpolitik. A 75–84

Barzahlung und Banktrennung. A 126–134

Der Wahlrechtskampf in Preussen. A 307–314

Die Neue Zeit Jg. 28 (1909/10)

Die Maifeier und ihre Wandlung. A II 129–135

Der Parteitag in Magdeburg. A II 892–900

Stephan Großman: Herzlich Grüße. R II 992

※Der Parteitag von Magdeburg. A II 997–1001

1911

Der Kampf Jg. 4 (1910/11)

Die Anfänge des Merkantilismus in England. A 301–304

Die Neue Zeit Jg. 29 (1910/11)

Aus der Frühzeit der englischen Nationalökonomie. A I 908–921⁶⁾

Karl Diehl und Paul Mombert: Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Ökonomie. Bd. 1, Zur Lehre vom Geld. R II 124–125

※Aus der Vorgeschichte der Marxschen Ökonomie (1–2), I. Zur Methode der Geschichtsschreibung. A II 572–581; 620–628⁷⁾

※Der Parteitag und die auswärtige Politik. A II 799–806

※Aus der Vorgeschichte der Marxschen Ökonomie (3), II. Von Ricardo bis Jones. A II 885–984⁷⁾

1912

Der Kampf Jg. 5 (1911/12)

Die Gesamtpartei ist tot, es lebe die Gesamtpartei. A 13–19

Das Wahlgewitter. A 193–199

Die Neue Zeit Jg. 30 (1911/12)

※Aus der Vorgeschichte der Marxschen Ökonomie (4). III. Richard Jones. A I 343–354⁷⁾

Zur Theorie der Kombination. A I 550–557⁸⁾

Geld und Ware. A I 773–782⁹⁾

Richard Woldt: Das grossindustrielle Beamtentum. R II 132–134

Sozialdemokratische Steuerpolitik. A II 221–225

Mit gesammelter Kraft (Nach dem Chemnitzer Parteitag). A II 1001–1006
Ludwig v. Mises: Theorie des Geldes und der Umlaufmittel. R II 1024–1027

1913

Die Neue Zeit Jg. 31 (1912/13)

Der Balkankrieg und die Großmächte. A I 73–82

※Das, was war. A I 168–172

※Die Erneuerung des Dreibundes. A I 458–466

※Totentanz. A I 745–749

※Tumel. A I 849–854

※Heinrich Dietzel: Kriegssteuer oder Kriegsanleihe. R II 90–92

※Zum Parteitag. A II 873–880

※M. Nachimson: Die Staatswirtschaft – Eine kritisch-theoretische Beleuchtung. R II 943–944

1914

Die Neue Zeit Jg. 32 (1913/14)

※Eine neue Untersuchung über die Arbeitsmittel. A I 981–985

Organisationsmacht und Staatsgewalt. A II 140–156

1915

Der Kampf Jg. 8

Historische Notwendigkeit und notwendige Politik. A 206–215

Ein neutraler Sozialist über die sozialistische Neutralität. A 265–272

Arbeitsgemeinschaft der Klassen? A 321–329

Europäer, nicht Mitteleuropäer! A 357–365

Machtpolitik oder Demokratie. (underdrückte artikel)

Die Neue Zeit Jg. 33 (1914/15)

Die Sozialdemokratie am Scheidewege. A II 489–499

Kritisches Mißverständnis oder mißverständliche Kritik. A II 716–717

Sozialistische Betrachtungen zum Weltkriege (Max Adler: Prinzip oder Romantik?). A II 840–844

1916

Der Kampf Jg. 9

Der Konflikt in der deutschen Sozialdemokratie. A 11–15

※Phantasie oder Gelehrsamkeit? A 54–63

※Die Vereinigten Staaten und der Krieg – Rundschau. A 127–128

※Dr. Fritz Mender: Das moderne Zollschutzsystem. R 343–344

※[K.E.] Oesterreich und seine Landwirtschaft. A 429–441

Die Neue Zeit Jg. 34 (1915/16)

※Um die Zukunft der deutschen Arbeiterbewegung. A II 167–175

1917

Die Neue Zeit Jg. 35 (1916/17)

※[K.E.] Handelspolitische Fragen(1–7). A I 5–11; 40–47; 91–99; 118–126;
141–146; 205–216; 241–246

1919

Zur Sozialisierungsfrage. (Referat auf dem 10. Deutschen Gewerkschaftskongreß vom 30. Juni bis 5. Juli 1919 zu Nürnberg)

Die Frage der Internationale. (Referat auf der Generalversammlung der Bezirksorganisation Berlin-Stadt USPD am 28. Sept. 1919)

Die Krise der Internationale. (Rede auf der Luzerner Konferenz der 2. Internationale 1919)

Archiv f. die Geschichte des Sozialismus u. Arbeiterbewegung Jg. 8

Franz Petry: Der soziale Inhalt der Marxschen Werttheorie. R 439–448¹⁰⁾

Der Kampf Jg. 12

Die Internationale. A 517–524

Taktische Probleme. A 837–841

1920

※Gegen der Moskauer Diktat! (Rede) Leipzig : 28S.

Revolutionäre Politik oder Machtillusionen? (Rede gegen Sinowjew auf dem Parteitag der USPD in Halle) Berlin: 38S.

Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen. (Referat auf dem 1.

Betriebsrätekongreß, gehalten am 5. Okt. 1920) Berlin: 28S.

1921

Die Wiedergutmachung und das internationale Proletariat. (Rede auf der Internationale Sozialistischen Konferenz in Wien)

Selbstverwaltung in der Industrie. Einleitung zu George Douglas Howard Cole: Selbstverwaltung in der Industrie.

Der Kampf Jg. 14

※Die Einigen der deutschen Arbeiterklasse. A 265–271

1922

Schmollers Jb. f. Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft. im Deutschen Reich Jg. 46

Die Weltpolitik, das Reparationsproblem und die Konferenz von Genua.
Ht. 3/4 1–28

1924

Die Reichstagswahlen und die Sozialdemokratie. (Rede auf dem Berliner Parteitag der SPD 1924)

※Für die soziale Republik. (Rede) Berlin: 16S.

Martow und die Internationale. in Julius Martow: Sein Werk und seine Bedeutung für den Sozialismus.

Die Gesellschaft Jg. 1

Probleme der Zeit. A I 1–17

Handelspolitik und Agrarkrise. A I 113–129¹¹⁾

Trusts und Kartelle in England. A I 296–305

Realistischer Pazifismus. A II 97–114

1925

※Die Aufwertungsfreundlichkeit der Sozialdemokraten. (Rede) Berlin: 8S.

Programmrede auf dem Heidelberger Parteitag. (Protokoll……)

Die Schicksalsstunde der deutschen Wirtschaftspolitik. Berlin: 23S.

1926

Die Gesellschaft Jg. 3.

Krieg, Abrüstung und Milizsystem - Drei Beiträge zum Abrüstungsproblem

I. A I 385–398

Politische Probleme – Zum Aufruf Wirths und zur Rede Silverbergs. A II
289–302

1927

Die Aufgaben der Sozialdemokratie in der Republik. (Rede auf dem Parteitag
der SPD zu Kiel) Berlin: 23S.

Die Gesellschaft Jg. 4

Theoretische Bemerkungen zur Agrarfrage. A I 421–342

1928

Die Gesellschaft Jg. 5

✕Adolf Weber: Hat Schacht recht?– Die Abhängigkeit der deutschen Volkswirtschaft vom Ausland. R I 181–184

Überseejahrbuch Hamburg Bd. 5

Deutsche und internationale Verschuldung.

1929

Diskussionsrede zum Bericht der Reichstagsfraktion auf dem Parteitag der
SPD in Magdeburg. (Protokoll……)

1930

Die Gesellschaft Jg. 7

Der Austritt aus der Regierung. A I 385–392

In der Gefahrenzone. A II 289–297

Magazin der Wirtschaft Jg. 1930

Handelspolitik am Scheideweg.

1931

Gesellschaftsmacht oder Privatmacht über die Wirtschaft. (Referat gehalten auf

dem 4. AfA-Gewerkschaftskongreß Leipzig).

Einleitung zu Léon Blum. Ohne Abrüstung kein Friede. Die französische Sozialdemokratie im Kampf um die Organisation des Friedens. Berlin
Die Eigengesetzlichkeit der kapitalistischen Entwicklung. Kapital und Kapitalismus, hrsg. v. Bernhard Harms.

Die Gesellschaft Jg. 8

Hermann Müller. A I 289–292

In Krisennot. A II 1–8

Unheimlich Tage. A II 101–107

Probleme der Kreditkrise. A II 233–241

1932

Die Gesellschaft Jg. 9

Unter der Drohung des Faschismus. A I 1–12

Sozialistische Bildung Jg. 1932

Sozialismus und Eigentum.

1933

Die Gesellschaft Jg. 10

Zwischen den Entscheidungen. A I 1–3

1934

Zeitschrift für Sozialismus Jg. 1 (1933/34)

Revolutionärer Sozialismus.

Die deutsche Krise.

1935

Zeitschrift für Sozialismus Jg. 2 (1934/35)

Karl Kautsky (Zum 80. Geburtstag am 15. Okt. 1934).

Das Londoner Abkommen.

Macht ohne Diplomatie – Diplomatie ohne Macht.

Das Ende der Völkerbundspolitik.

1936～

State Capitalism or Totalitarian State Economy. *Socialist Courier*, N. Y. 1940

Wiederabdruck in: *Modern Review* Vol. 1 N. Y. 1947

Das historische Problem. Aus dem Nachlaß hrsg. und eingeleitet von Benedikt Kautsky. *Zeitschrift für Politik*, Jg. 1, N. F. Ht. 4. 1954 S. 293-324.

(1) 八木沢善次訳「価値学説史に就て」, リイブクネヒト著, 同訳『英国価値学説史』(弘文堂書房, 1926年7月) 251～263ページ。

(2) 赤松五百麿訳「ボエーム・パウエルクのマルクス評」, 『我等』第7巻第4～9号, 1924年4～9月 ページ省略。

塚本三吉訳「ボエーム・パウエルクのマルクス批評」, ヒルファディング著, 同訳『労働価値説の擁護』(改造文庫, 1935年1月) 7～133ページ。

玉野井芳郎, 石垣博美訳「ペーム・パウエルクのマルクス批判」, ヒルファディング著, 同訳『マルクス経済学研究』(法政大学出版局, 1955年9月; 新装1968年6月) 131～218ページ。

(3) 塚本三吉訳「マルクスに於ける理論経済学の問題提起について」, 前掲書, 135～172ページ。

玉野井芳郎, 石垣博美訳「カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起について」, 前掲書, 107～130ページ。

(4) 玉野井芳郎, 石垣博美訳「景気」, 前掲書, 257～284ページ。

(5) 全訳のみ。

林要訳『金融資本論第1～3分冊』, 弘文堂書房, 1926年。同訳『金融資本論合本』, 弘文堂書房, 1927年, 778ページ。同訳『全訳金融資本論』, 改造社(同文庫), 1929年, 724ページ。同訳『金融資本論』, 平凡社(社会思想全集), 1931年, 645ページ。同訳『全訳金融資本論 改版』上, 下巻, 世界評論社 1948～49年。同訳『金融資本論』, 大月書店, 1952年 611ページ。同訳『金融資本論』I, II, 大月書店(国民文庫), 1955年。同訳『改訳金融資本論』, 大月書店, 1961年, 554, 50ページ。同訳『改訳金融資本論』I, II, 大月書店(国民文庫), 1964年,

岡崎次郎訳『金融資本論』上・中・下巻, 岩波書店(岩波文庫), 1955～56年。

(6) 玉野井芳郎, 石垣博美訳「初期のイギリス国民経済学より」, 前掲書, 81～106ページ。

(7) 玉野井芳郎, 石垣博美訳「マルクス経済学前史より」, 前掲書, 1～80ページ。

(8) 玉野井芳郎, 石垣博美訳「企業連合の理論について」, 前掲書, 239～255ページ。

(9) 笠信太郎訳「貨幣と商品」，同訳『金と物価——マルクス主義貨幣論争』（未見）

玉野井芳郎，石垣博美訳「貨幣と商品」，前掲書，219～238ページ。

(10) 赤松五百磨訳「フランツ・ペトリー著『マルクス価値論の社会的內容』を評す」，『我等』第7巻第12号，1925年12月，106～116ページ。

塚本三吉訳「フランツ・ペトリー『マルクス価値論の社会的內容』」，前掲書，173～199ページ。

(11) 太田徹夫訳「商業政策と農業恐慌」，『日本法政新誌』第24巻第1号，1927年1月，88～102ページ。

追加：1932 Nationalsozialismus und Marxismus. (Rede nach den amtl. Reichstagsstenogramm) 〔大野英二「ヒルファーディングとシュトラッサー」『経済論叢』第105巻 第1・2・3号，1970年3月による〕

経済資料研究 No. 4 予 告

研 究

古い経済系図書館の検索体系の近代化（仮題）

松田芳郎

統計分類の比較照合について

前田昇三

研 究 余 滴

モスクワの読書風景

尾崎彦朔

レファレンス・ブックス

経営史

神戸大学経済経営研究所

1970年12月 発行予定